

第6章 整備後の課題

魅力ある流域を目指し、回廊構想を将来的に実現していくためには、治水・利水・環境等のバランスが取れた流域づくりが不可欠となることから、ここでは、整備後の課題とその取組み方針をまとめました。

[緑地等の保全]

柳瀬川流域には、河畔林、崖線の緑、里山などの緑地が存在しています。

こうした緑地は、雨水の地下への涵養を促進させるため流域の保水力を高め、河川の流量を確保する一方、豪雨時の洪水をはじめ様々な災害を最小限に食い止める緩衝地帯となっています。

また、水とともに豊かな生態系を保ち、ヒートアイランド現象を緩和するほか、人々に安らぎをもたらしています。流域には、グリーンベルト状に崖線の緑が続き良好な姿で残っており、貴重な山野草が豊富に息づいているため、市民の財産として公有地化するなどその保全に努めていく必要があります。

さらに、柳瀬川流域の緑の特徴として里山が上げられ、流域固有の自然環境、歴史・文化を象徴する存在と言えます。木々のほとんどがクヌギ、コナラを中心とした2次林であり、萌芽更新など適切な手入れを行っていく必要があります。

里山は都の緑地保全地域として、市の保存樹林として、所有者の協力を得ながら保全に努めていますが、継続的にミニ公募債の発行その他により財源を確保し、公有地化を図ることが望まれます。これらの保全は市民との協働によりその維持管理に努めていきます。

流域の農地は、農家の経済基盤であるばかりでなく、緑地と同じように、雨水の地下への涵養を促進させるため、流域の保水力を高め、河川の流量を確保する一方、豪雨時の洪水をはじめ様々な災害を最小限に食い止める緩衝地帯となっています。また、むさし野の風景を特徴づける大きな要素にもなっています。

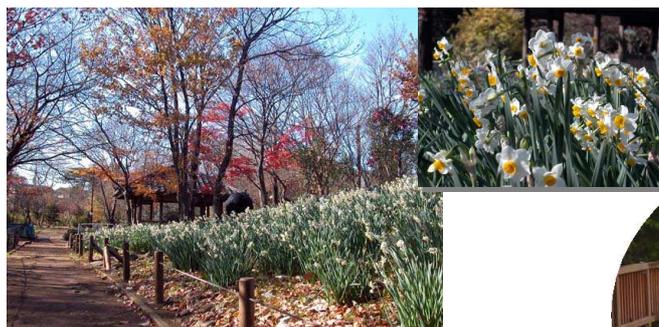
地域経済の発展の視点からも、魅力ある流域づくりの視点からも、農地は重要であるため、その保全が図られるよう生産緑地の適正管理や農業振興に努めていきます。



〔公園整備〕

流域には、せせらぎ公園、清瀬金山緑地公園、金山調節池などの親水公園が整備されています。これらは、親水・学習・安らぎ・防災など多様な機能を有しながら、柳瀬川の水辺や流域の緑地などとともに魅力ある流域空間を構成しています。なかでも金山調節池は、カワセミなど 100 種程といわれる野鳥が営巣または飛来するため、バードウォッチングのスポットとして愛鳥家から注目されています。ここでは、良好な環境を保つため、長年にわたり市民による地道なボランティア活動が続けられていますが、これからの公園維持管理のモデルケースと言えます。

今後も市民の積極的な参加と協力により、その内容や規模を多様化させながら拡大していく必要があります。



[水質・流域環境の保全]

柳瀬川流域の大部分で下水道整備が進んできたため、河川の水質も下流部では環境基準(E 類型: BOD10mg / ℓ をクリアしてきています。今後も積極的な水質改善PRに努め、下水道接続の普及を推進するとともに、公共下水道処理区域の面的整備を行い、柳瀬川の水質のより一層の改善を図ることが大切です。

また、夜間の人通りがほとんどない河岸の草むらは、布団や家具など粗大ゴミの捨て場になりやすい傾向にあります。特に、家電リサイクル法の施行に伴い、テレビや冷蔵庫など壊れた家電製品が投棄される可能性が高まっていますが、これら家電製品には人体に悪影響を及ぼす有害物質が含まれているため、不法投棄防止に努めなければなりません。

さらに、行楽シーズンには、ビン・缶・発泡スチロールなどが残された状態となることがあり、これらは環境衛生上問題があるばかりでなく、美観をも損ねるため、マナー遵守のキャンペーン等の推進に努めます。

生物化学的酸素要求量 (B O D) の環境基準

環境基準は、維持されることが望ましい基準として環境基本法に基づき定められたもので、このうち、生物化学的酸素要求量 (B O D) は河川における代表的な水質汚濁の指標であり、水域ごとの利用目的に応じ A A 類型 (B O D 1 mg / L 以下) から E 類型 (B O D 10 mg / L 以下) までの 6 種類の区分があります。

